

論文の内容の要旨

氏名：山 田 涼 馬

博士の専攻分野の名称：博士（心理学）

論文題名：記憶に及ぼすスキーマの影響

本学位請求論文の目的は、我々が日々体験する出来事に関する記憶であるエピソード記憶に、その出来事に関する知識であるスキーマがどのように関わるかを検討することである。

第 I 部は序論である。第 1 章ではまず、本論文の属する研究領域と、先行研究を紹介した。自身が体験したことの無い出来事を想起する「虚偽記憶」を生じさせる要因として、特定の場面に関する過去経験を構造化した認知的枠組みであるスキーマが挙げられる。再認課題におけるスキーマの影響を検討した研究では(e.g., Lampinen, Copeland, and Neuschatz, 2001), 特定の場面のスキーマに一致しないターゲットはディストラクタと容易に区別されることと、スキーマに一致するディストラクタに対して虚再認が生じることが示された。Graesser らの提唱したスキーマコピープラスタグモデル(the schema-copy-plus-tag model; e.g., Graesser, Kessler, Kreuz, & McLain-Allen, 1998)によると、出来事を体験する際にスキーマが活性化し、スキーマ不一致ターゲットは明確に精緻化されるが、スキーマ一致ターゲットは明確には精緻化されない。再認課題時にもスキーマは活性化し、スキーマ一致ディストラクタがターゲットとして受容されやすくなる。このように受容されやすくなったディストラクタと、精緻化されていないスキーマ一致ターゲットとの区別ができずに、虚再認が生じるのである。再認課題に加え、「その項目をどのように想起したか」という想起意識にスキーマが及ぼす影響も検討され、項目をはっきり回想した場合に Remember, 回想できないが親近感を感じる場合に Know と回答を求める Remember/Know 判断手続きや、どのような詳細を想起したかについての回答を求める Perception/Thought/Emotion/Context 質問紙が用いられる。結果、スキーマ不一致ターゲットに対して Remember 判断が生じることが確認された。スキーマコピープラスタグモデルが提唱するように、スキーマ不一致ターゲットが精緻化されたため回想されたと考えられる。また、スキーマ一致ディストラクタに対する虚再認に Know 判断が多く伴う結果も確認され、スキーマの活性化によってスキーマ一致ディストラクタに対し親近感が抱かれたために受容されたといえる。

第 1 章の内容を踏まえ、第 2 章では、本研究の目的、構成、意義を論じた。先行研究では、「特定の場所で行われている行為」か、「特定の場所に置いてある物品」のどちらかが検討対象とされることが多かった。そこで本研究では、日常生活において体験する場面について、場所・行為・物品の 3 要素を想定し、各要素から活性化するスキーマが再認記憶と想起意識に及ぼす影響を検討した。具体的には、場所、行為、物品の順に優先的な情報であるという階層性を仮定し、各要素からスキーマが活性化するとした。場所から活性化するスキーマを場所スキーマとし、行為と物品から活性化するスキーマを、併せて使用スキーマとした。この仮説から、以下を予想した。行為よりも物品の方が優先度の低い情報であるため、場所スキーマの影響が大きくなると予想した。研究 1 の実験 1, 2, 3 で、この予想を検証した。そして、行為や物品の記憶に及ぼす影響は、使用スキーマよりも場所スキーマの方が大きいと予想した。研究 2 の実験 4, 5 で、この予想を検証した。このような実験操作により、日常生活で体験する場面の認識と記憶の有り様を包括的に捉えることが可能になると考えられる。

第 II 部は、場所スキーマが行為と物品の再認記憶と想起意識に及ぼす影響を比較した研究 1 に関する内容である。第 3 章では、続く第 4 章と第 5 章で言及する実験 1 と 2 で使用する項目を決定するために行った質問紙について言及した。実験 1 では場所スキーマに一致する行為と物品、一致しない行為と物品をターゲットとして提示した。その結果、物品に関しては場所不一致ターゲットに対して Remember 判断がなされた。つまり精緻化されたといえる。しかしながら行為では、場所不一致ターゲットよりも場所一致ターゲットに対して Remember 判断が生じた。場所一致行為ターゲット同士の関連性を精緻化して文脈を把握する試みの中で、場所不一致行為ターゲットの精緻化が抑制された可能性がある。また、物品でも行為でも、場所一致ディストラクタに対して虚再認が生じており、行為よりも物品に対して、

より多くの虚再認が生じた。つまり、場所スキーマは物品に対して虚再認をより生じさせたといえる。

第5章では、場所スキーマに一致する行為と物品のみをターゲットとして提示した実験2について言及した。実験の結果、行為でも物品でも、場所一致ディストラクタに対して虚再認が生じており、行為よりも物品に対して、より多くの虚再認が生じた。場所スキーマは物品に対して虚再認をより生じさせたといえる。

第6章では、続く第7章で言及する実験3で使用する項目を決定するために行った質問紙について言及した。実験3では、場所スキーマに不一致な行為と物品のみをターゲットとして提示した。その結果、場所一致ディストラクタに対して虚再認が生じており、行為よりも物品に対して、より多くの虚再認が生じた。場所スキーマは物品に対して虚再認をより生じさせたといえる。また、実験1と異なり、場所不一致行為ターゲットに対して Remember 判断が生じた。文脈を把握する試みがなされず、精緻化が抑制されなかったと考えられる。

第8章では、場所スキーマが行為よりも物品で虚再認を生じさせた実験1, 2, 3の結果から、場所スキーマの影響が行為の記憶よりも物品の記憶において大きかったと考察することで、研究1のまとめとした。

第III部は、場所スキーマと使用スキーマの影響を比較した研究2に関する内容である。第9章では、続く第10章で言及する実験4で使用する項目を決定するために行った質問紙について言及した。実験4では、物品における場所スキーマと使用スキーマの影響を検討した。具体的には、場所一致行為が行われている場合（場所一致行為群）と、場所不一致行為が行われている場合（場所不一致行為群）で、行為一致物品と、場所一致行為不一致物品と、場所不一致行為不一致物品に対する再認成績と想起意識を検討した。その結果、場所不一致行為群において、場所一致行為不一致物品ターゲットよりも行為一致物品ターゲットに対して Remember 判断がなされた。つまり、使用スキーマよりも場所スキーマに一致しないことによって物品が精緻化されたことが示された。また、場所不一致行為群において、行為一致物品ディストラクタよりも場所一致行為不一致物品ディストラクタに対して虚再認が生じた。使用スキーマよりも場所スキーマの方が虚再認を生じさせたといえる。

第11章では、続く第12章で言及する実験5で使用する項目を決定するために行った質問紙について言及した。実験5では、行為における場所スキーマと使用スキーマの影響を検討した。具体的には、場所一致物品一致行為と、場所一致物品不一致行為と、場所不一致物品一致行為と、場所不一致物品不一致行為に対する再認成績と想起意識を検討した。その結果、場所不一致行為ターゲットと物品不一致行為ターゲットに対して、他2行為ターゲットよりも Remember 判断が伴うという結果は認められなかったが、Emotion 判断はなされていた。特に場所不一致行為ターゲットに対して顕著に確認されたため、使用スキーマよりも場所スキーマに一致しない行為の方が奇異であると認識され、その際に感じた感情が回想されたと考えられる。また、虚再認は顕著に確認されなかったが、場所不一致物品不一致行為ディストラクタよりも、場所一致物品不一致行為ディストラクタや、場所不一致物品一致行為ディストラクタに対して虚再認が生じた結果が認められた。つまり、場所スキーマや使用スキーマが虚再認を生じさせた可能性が示唆された。

第13章において、研究2の結果をまとめた。実験4, 5のターゲットの結果は、使用スキーマよりも場所スキーマに一致しないことによって、物品や行為が精緻化された可能性を示している。そして実験4のディストラクタの結果は、使用スキーマよりも場所スキーマの方が虚再認を生じさせることを示している。つまり、行為の記憶においても、物品の記憶においても、使用スキーマよりも場所スキーマの影響が大きい可能性が示されたといえるだろう。

第IV部は結論である。第14章では総合考察をおこなった。本研究では、特定の場面の情報認識とスキーマに関して、場所・行為・物品の階層性仮説を立てた。この仮説は、研究1, 2の結果によって支持された。すなわち、場所スキーマが行為と物品の記憶に及ぼす影響を比較検討した研究1では、場所スキーマが行為よりも物品で虚再認を生じさせることが確認された。そして物品の記憶と行為の記憶において場所スキーマと使用スキーマの影響を比較した研究2では、使用スキーマよりも場所スキーマの方が、物品と行為の記憶に及ぼす影響が大きい可能性が示されたのである。

第15章において、場所スキーマがエピソード記憶に及ぼす影響は使用スキーマよりも大きいという本研究の結果は、虚偽記憶研究領域の発展に貢献するものであることを述べ、本学位請求論文の結びとした。